

蒼海の母神

レンヌ第2大学主任准教授, 社会科学・人類学系研究室
レンヌ日本文化研究センター所長

アンベール=雨宮 裕子

2011年6月2日 山口大学にて講演

を紹介して一つに結ばれているのです。

はじめに

山口県は本州の西端に位置する海に囲まれた国です。フランスのブルターニュ地方も、同じように西端に位置する半島です。異国の文化は、古来から海の路を渡ってやってきました。海辺の民は、水平線の彼方をどんな思いで見つめてきたのでしょうか。海はそばにありながら遠く、陽の光に色を変えつつ、陸に寄り添っています。海を見て、ふとこみ上げる思いのありかを、三好達治はこんな詩にしています。

海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がいる。

そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。 「郷愁」

漢字の海は、母の字を孕み、フランス語の海を示す言葉 Mer (メール) は、母を示す Mère (メール) の中に潜んでいます。海は^{はは}；妣の国であり、母の愛は海のごとく深し。日本とフランスの二つの文化は、海

武本雅嗣先生にお声をかけていただき、私は日本のブルターニュ、山口を訪れる機会を得、海の姫神伝承の話をさせていただきました。萩市の笠山から日本海を見渡すと、はるか向こうには対馬が、そして朝鮮半島が広がっていることを実感します。かつて、この海路を人と文化が往来していました。対馬半島の南端の^{あざ}；^も浅；藻は、山口から渡ってきた人たちが移り住んだ村です。また、半島中部の^に；^い仁；位には、^わ；^{たつ}和^み；多都；美神社があり、水界の母神、豊玉姫の霊石が鎮座しています。霊石は^{やしろ}；社の奥の原生林の中にあり、前に開ける海原には鳥居が連なって、静謐な空気に包まれています。森も社も海も神の宿る聖域として一体となり、そこに立つだけで私たちは妣の海神宮へと^{いざな}；誘われていきます。山口の自然と武本先生をはじめ私を歓迎してくださった諸先生方に感謝の意を表しつつ、フランス（ブルターニュ地方）の水界の姫神伝承をめぐる私論を次に展開します。

- 海の伝承

風ぐ海もあれば、猛る海もある。東日本大震災の津波は、三陸海岸を嘗めつくす猛威をふるい人も村も呑み込んでしまった。けれど、波が退いてみれば、あるのはいつもと変わらない穏やかな海原。そんな海を、古代から日本の人々は、畏れ、敬い、祀りつつ生きて来た。浜で貝を採り、沖で魚を釣り、尽きない幸を有難く身の糧にする。海は訪れる者を拒まず、誰にでも幸を分け与えてくれる。その大らかな包容力と豊饒性が人々に理想郷を思い描かせた。常世、蓬莱、竜宮などと呼ばれる、海の彼方の宮殿がそれである。男は水界に誘われ、姫神の宮で夢幻のもてなしに酔いしれ、地上の生活を忘れてしまう。

一方、海に囲まれたブルターニュ半島¹にも、水界の姫神伝承が語り継がれている。本稿では、「イスの町」の伝承を取り上げ、その変遷と伝播を、伝承にまつわる史跡や、図像化された異形の女像との関連を考えつつ分析する。「イスの町」に登場する姫神は、異類の母をもつ。日本の異類婚姻譚にはない型の伝承である。その特殊性を浮き彫りにするために、まず、日本とフランスの両文化圏に伝わる異類女房譚を比較し、伝承の象徴的意味を概観する。日本は、記紀神話の「豊玉姫」を、フランスは「メリュジーヌ」伝承を参照する。そのうえで、「イスの町」の伝承の変遷を、聖者伝や民話集に辿り、水界の姫神の登場に至る背景を考察する。次いで、伝承にまつわる史跡や、図像化された異形の女像の分布域を確認し、宣教師たちの布教活動の足跡と重ね合わせて、伝承の深層を探る。

- 水界の母神

古代の日本人が夢想した海の彼方の理想郷は、「浦島」や「海幸山幸」の説話として、『古事記』（712）や『日本書紀』（720）など、現存の最古の文献に納められている。男が海を漂って、いつの間にか辿り着く姫神の宮殿は、^{みなそこ}；水底にひっそり眠っている。「海幸山幸」の後半の、「豊玉姫」の説話がとりわけ大きな意味を持つのは、建国の始祖、神武天皇の誕生を語っているからである。記紀神話では、次のように展開する。

- 海神の娘、豊玉姫は妊娠し天神の皇子、山幸（^{ひこ}；彦^ほ；火^ほ；火^で；出^{みの}；見^{みこと}；命）のもとへ来る。出産のために海辺の産屋にこもり、山幸に覗かぬようにと言う。山幸がこっそり見ると、姫は大きな鮫に身を変えて、うねりくねっている。姫は見られたことを恥じて、生れた子を残したまま、水界へ去る。しかし、息子を思い、乳母に妹の玉依姫を送ってよこす。息子は後に、乳母の玉依姫と結婚し、4人の息子をもうける。長子と末子は父のもとに残り、中二人は海中の常世、あるいは妣の国へ行く。末子は建国の始祖、神武天皇となる。 -

これは、異類女房譚と称される伝承の型にあたる。「鶴女房」、「狐女房」、「蛇女房」など、日本には異類女房譚が多く継承されているが、その展開に共通する特長は、異類の女房が男に子孫や富や力を残した後で本当の姿を見られ、異界へ去って行くことである。タブーを犯したのは夫だが、その

ために去る運命を負わされるのは妻である。「蛇女房」譚では、泣く子に困った父親に、母は両目をくり抜いて与えているⁱⁱ。玉は乳に代わる滋養に満ち、異界の母の霊力を内に秘めた宝珠となる。その力を支えに、息子はやがて殿様になる。二つの宝珠は豊玉姫の父である海神が、山幸に与えた潮の干満を自在に操る宝珠と同じ霊力を持つⁱⁱⁱ。

豊玉姫は出産のためにわざわざ陸へ上がり、水界の霊力を子孫に伝えて、去っていく。産みおとした子を育てるのは、妹のたまより；玉依姫で、やはり水界からやってくる。息子のう；鵜がやふきあえずの；茅葺不合みこと；尊は、やがて乳母の玉依姫と結婚し、4人の男児をもうけ、その末子が建国の始祖となる。生れた男児には、豊玉姫と玉依姫という、水界の二人の姫神の霊力が継承され、神武天皇の並びない優位性が、こうして確立されるのである。

異類女房譚は、フランスにも伝えられている。メリュジーヌ伝承と称される物語で、このテーマは、フランスやドイツの中世文学を賑わせている。ポワチエ地方のかつての領主 Lusignan (リュジナン) 家の始祖伝説となっている類話は次の通りである^{iv}。

- レモンダン伯は、泉のほとりでメリュジーヌに出会い、結婚を申し込む。メリュジーヌは、土曜日には彼女の姿を見ないという約束で承諾する。リュジナンの地には素晴らしい城が建ち、10人の子が生れて家は富み栄える。ところが、レモンダン伯はそそのかされて土曜日に妻の後を追ひ、蛇の尾をくゆらせて水浴する妻の姿を見てしまう。見られたと知ったメリュジーヌは泣

きながら夫を責め、翼の生えた半蛇の姿で、窓から飛び去る。 -

豊玉姫の場合も、メリュジーヌの場合も、異界の姫は、「見るなのタブー」を男が破つたために、去ることになる。豊玉姫は出産の際に「本つ國の形」になったのを見られ、メリュジーヌは半蛇の姿で水浴しているのを見られて破局となる。けれど、豊玉姫と山幸の出会いは、姫の「本つ國」の海である。「本つ國」では起こらないタブーが、何故、出産後に取り沙汰されるのか。メリュジーヌの場合も、レモンダン伯の後追いは、メリュジーヌが魔力が家を富み栄えさせ、10人の子を残してから起こっている。つまり、タブーはあくまで口実であり、母神はその霊力ゆえに呼び寄せられ、機能を果たしたら速やかに追いやられているのである。もう一点重要なのは、生れた子の性別が語られる場合、それは必ず男児であり、秀でた人物になるということだ。

- 亡国の姫

それでは、娘が生れたらどうなるのだろうか。女兒誕生の伝承は、日本の異類婚姻譚には例がないが、ブルターニュには存在する。「Is (イス) の町」、「海に呑まれた町」と名付けられた伝承がそれで、海に沈んだイスの町があったとされる場所が、今も語り伝えられている。次の紹介するのは近年の類話である^v。

- イスの町のグラロン王は、北欧の海辺へ征服に出かける。城を攻撃するが、いっこうに落ちないので部下たちは帰路につく。

王は一人残り、城の女王と出会う。女王は妖精である。妻に迎えて国へ向かうが、舟は波間を漂って陸に着かない。女王は船中で女兒を出産し、自分のこの世での役割は終わったと、妖精の国へ還ってしまう。彼女が去るや、舟は無事にイスに着く。王は、ケルトの古い信仰からキリスト教に改宗する。しかし、娘のダユは教会へ行こうとさえしない。ある夜、見知らぬ王子が城へ来て、ダユをとりこにする。ダユは王子の言うままに、父の首から町の水門の鍵を取ってくる。王子は水門を開けて去り、町に潮があふれる。王は娘を後ろに乗せ、馬で逃げようとする。そこへ聖ゲノレが駆けつけて、十字架で娘を叩く。娘が落ちて波に呑まれるや潮は止まる。ダユは死んで水の精に生まれ変わる。彼女は魔力で不幸な水夫たちを海中に引き入れている。 -

この伝承の類話はブルターニュの各地で採集され、19世紀初頭の雑誌『民間伝承』には、200話以上の報告があったという^{vi}。De la Villemarqué は、ウェールズやアイランドにも伝わる古代ケルトの伝承としている^{vii}が、ロシアでも「沈んだ町」の類話が多数採集されている。中でも、キシテの町の水没が馬に乗った娘に引き起されるのは、「イスの町」と重なって興味深い^{viii}。町の水没の話には、征服された民族、没落した王国などの遠い記憶が、伝承の深層にあるのではないかと。

「イスの町」は、異類の母が王に残した娘のせいで水没する。異類婚が女兒の誕生を語らない訳がここに見て取れる。異界の霊力が娘に継承された場合、娘の力（自然

の力）は王の力（文化の力）に勝って、イスの町（斯界）を海（他界）のテリトリーに組み入れてしまうのだ^{ix}。娘はもともと海（他界）の存在だ。だから再生して、海に沈んだイスの町に君臨する水の精となっている。

「イスの町」は、キリスト教の伝道師の口を介して広まったとも言われ、司祭の手になる古伝承がいくつか現存している。最も古い記録は、15世紀末に Le Baud 神父が記した話である^x。

- 海辺に栄えたイスの町は、住民たちの罪で海に呑まれた。その時、この町にいたグラロン王は、奇跡的に難を免れた。それは聖ゲノレの力によるものだった。 -

これは、聖者ゲノレの力を示す聖者伝承である。グラロン王は5世紀後半、コルヌアーユ地方に王国を創った実在の人物で、聖者ゲノレも、そこに初めて建てられた僧院の院長であったといわれる。「イスの町」は聖者ゲノレの逸話と結び付いて語られ、町は住民の墮落のために神罰を受け、ソドムのごとく滅び去ったと語られる。Le Baud 神父の記述には、王の娘は登場していない。

ところが、いつの頃からか、神罰を受けるくんだり墮落した住民から、王の娘にすり替わっていき、娘にはダユという固有名詞が付けられるようになる。現存の文献を手掛かりにするなら、1636年の Le Grand 神父の手になる『ブルターニュ半島の聖者伝』^{xi}の中には、次のように記されている。

- 町の水没の一番の原因は、よき王の淫らな娘 Dahut (ダユ) のせいだろうという。ダユは、「ダユの水門」あるいは「鍵の水門」と呼ばれる場所で王を殺したと信じつつ、自分も海に吞まれて死んだ。ダユは、王が首に掛けていた、王権のシンボルである鍵を奪ったのだという。 -

民俗学者の P. Sébillot は、聖者伝に民間伝承が取り込まれた類話とみている^{xii}が、ここに初めて王の娘ダユと、鍵が登場している。鍵は水門の鍵というよりも、王権のシンボルと語られ、王と娘は王権の鍵を争って死に至る。

- 魔性のダユ姫

ダユ姫は、17世紀頃「イスの町」の伝承に登場し、次第に物語の中心に入り込んでいった。19世紀前半に出版された伝承集^{xiii}では、ダユの魔性が強調され、町の水没を引き起こすのは、王の首から水門の鍵を奪ったダユとされている。「イスの町」は聖者伝に取り込まれ、民話集に採録され、文学的脚色を施された物語にもなって広く語り継がれた。

ここで、「イスの町」が聖者伝と結び付いていることに注目したい。伝承の変遷の過程に、宣教師たちの意図的な仕掛けが見てとれるからだ。イスの町があったとされる場所は、ブルターニュ西端、Finistère (フィニステール) 県の港町 Douarnenez (ドゥアルヌネ) の沖で、聖ゲノレの僧院のある Landévennec (ランデヴェネック) の近くである。「イスの町」の伝承には、次のような後日談^{xiv}がある。

- イスの町が水没してしまったあと、グラロン王は、王をこの悲劇から救った聖ゲノレに伴われてランデヴェネック僧院へ向かった。途中、メネゾム山の頂きに差しかけた時、遠くリュマンゴルの地に、生け贄を捧げる異教の祭礼の火が見えた。王はすぐさま誓った。「偶像崇拜の祭壇を取り壊し、代わりに、主の母マリアと三位一体に献げるキリスト教の教会を建てる」と。 -

この話は、教会の縁起譚となっている。Rumengol (リュマンゴル) の聖母教会は、古くから泉の水を求めて巡礼が集まる聖地であり、高台に建つ教会からは、遙か彼方にドゥアルヌネ湾を望むことができる。

「イスの町」にはもう一つ後日談が伝えられている。それは、ダユ姫が、海の娘に生まれ変わる伝承である。姫は、美しい人魚に転生して、海に生き、時折人の目に触れる場所に姿を現している。A. Le Braz が19世紀末に採集した二つの口頭伝承を紹介する(全文訳)^{xv}。

- アエスとかダユとかいうグラロン王の一人娘は、ずっと海をさまよってるんだ。父親が、聖者ゲノレに命じられて、その娘を海に突き落とした夜からね。ただ、名前はアエスやダユじゃなくて、マリ=モルガンヌに変えたよ。沖にきれいな月が出て、嵐が来そうな明るい晩にはね、娘が人魚の声で歌うのが聞こえるよ。昔の民謡にあっただろ。

「アエス、今はマリ=モルガンヌ、夜、月影で、歌います」

私にゃこれしか思い出せないけど。 -

この伝承はサン島で採集されている。サン島はイスの町があったとされるドゥアルヌネ湾の沖にある小さな島である。この話の中では、ダユ姫の魔性は語られていない。一方、A. Le Braz がやはりサン島で採集した次の伝承は、マリ=モルガンヌを海の魔物として語っている。前者の語り手は女性だったが、後者を語るのは「ロゼン叔父さん」である。

- その頃わしは12ぐらいで、島の水先船の水夫の見習いをしてた。ある朝、陽が昇る少し前、アルメンの近くで、ブレストへ戻る海軍の船団がやってくるのを待ってた時のこと。それまで本当におだやかでなめらかなだった海面が、これっぽちの風もないのに、船の左舷で、急に、さわさわと波立つのが見えた。

「あーッ！あーッ！あっちに、でかいやつがいるぞ！」

と、親方のティムールが叫んだ。

わしらは、てっきりでっかい魚でも出てくるものと思ってた。それがなんと、水の中からぬっと現れたのは、すっぴんのきれいな娘の上半身。驚いたのなんの！ みんなあっけにとられて、ぽかんと見とれてた。娘の真っ黒な髪は、額のところで2つ分けになって背中にたれていて、そこから一本のお下げになっているらしくて、それが体の周りにぐるぐる巻きついてた。娘はしゃんと胸を張って、乳房を腕で支えて、わしらをじっと見ていた。身のこなしが、あんまりにしなやかで軽いもんだから、動いて

いるようには見えなかったよ。でも、確かにわしらの方に近づいてきていた。

と、親方の指図だ。

「みんな權を取れ！思いっきり漕ぐんだ！」

親方の声は上ずってた。わしは何が何だか、手も足もぶるぶるふるえちまって。海軍のことなんかそっちのけで、わしらはもう必死に櫓を漕いで島に辿り着いた。港に錨をおろした時、仲間の男が言った。

「一日無駄にしちまったなあ。」

すると、ティムールは怒った口調で言い返したよ。

「お前は、死にしまった方がよかったのかい？」

そして、しんみり言ったんだ。

「なあみんな、ぶつくさ言わずに、十字を切って神様と聖ゲノレに感謝しようや。マリ=モルガンヌに出くわして、生きて還れたやつなんて、滅多にいねえんだから。」

それでわしはようやっとわかった。あの摩訶不思議な海のべっぴんが誰だったのかがね。あれからというもの、神様のおかげで、二度とあの女を見ることはなかったよ。 -

二つの口頭伝承が「イスの町」を下敷きにしているのは明らかである。生き生きした語り口が伝わるように、採話の全訳を載せてみたが、話者はダユ姫の歌声を耳にしたり、その姿に出くわしたりしたと語っている。口頭伝承は語り手と聞き手の双方があって、受け継がれていく。サン島には、人魚や海底の王国を信ずる人々がいて、その姿を海の彼方に思い描いて暮らしていたのだろう。

人魚の姿は、水界の豊饒神を彷彿とさせる。月明かりに照らされて、歌を歌いつつ髪をすくのはライン川のローレイであり、ポワチエのメリュジーヌである。水の娘は美しい裸身を月明かりにさらして、人間の男たちを魅了する。ブルターニュの伝承に現れる人魚は、聖者に出会って、キリスト教に改宗する異端の娘であったり^{xvi}、男の子を海に引き込む危険な誘惑者であったり^{xvii}、海底の宮殿で宝を守る姫神であったりと、様々な顔を見せている^{xviii}。P.-Y. Sébillotによれば、人魚を見たり、歌声を聞いたことがあるという船乗りたちは大勢いて、「人魚はみな、海に身を投げたグラロン王の娘ダユから生まれた」と信じられていたという^{xix}。

- 異類の女像

ブルターニュの文化遺産は、豊かな口頭伝承に留まらない。他の地域には類を見ない図像表象も、数多く生み出されている。その多くは16世紀から18世紀にかけて、ブルターニュが海路貿易で繁栄していた時に製作され、今もそのまま村の聖堂に納められている。流行りのスタイルや聖者伝の挿絵などをヒントに、地元の船大工達が腕をふるった像が多く、直截な表現の^{みなもと}源は、村の伝承や作り手の想像力であった。文字の読めない人々にも、彫像の判り易い表現は好まれ、日々の暮らしのよりどころになる神さまたちが、聖堂の中に並べられていた。たとえば、ドラゴンの背中を割って復活する聖女マルゲリーテの像(図1)は、安産の神さま、馬の蹄鉄を打つ聖エロワは馬の守り神^{xx}というように、ご利益の決まった聖者像があって、人々は必要に応じてその加護を祈るのが習わし

だった。



図1. St Hernin (Finistère)、St Hernin 教会、呑みこまれたドラゴンの背から復活する聖女マルゲリーテ、木製、彩色、16世紀ごろ

その図像群の中に、ひと際目を引く女像がある。聖母子像に踏みしだかれた異類で、上半身は裸女、下半身は蛇(魚)の姿をしている。こんな図像が教会の祭壇に置かれているのはフランスでも稀で、美術館で見かけることはあっても、聖像として安置されているのはブルターニュ地方ぐらいである。宗教美術の世界で、聖母子が異類を淘汰するという構図は、マリア信仰の台頭と共に登場し、13世紀には、パリやアミアンの聖堂の外壁に使われている。淘汰されるのは悪のシンボルであり、不浄のシンボルである。構図は、聖母マリアの聖性を強調するために創出され、初めはマリアが蛇や、墮落のイヴを踏みつけにしていたが、次第に洗練され、具象表現は宗教美術の主流からは消えて行く。

一方、ブルターニュでは、この聖母子の異類淘汰の像が、とりわけ人気を博した。どんな魔物を淘汰させようかと、職人は想像をめ

ぐらせ、様々な異形の女像が産み出されていた。最も古い例の一つは Le Folgoët (ル・フォルゴエット) の聖母教会の外壁に置かれた石 (Kersanton) の聖母子で、15世紀のものと推定されている (図2)。



図2. Le Folgoët (Finistère) 聖母教会、15世紀の石像、無彩色

ル・フォルゴエット聖母教会は、ブルターニュの内陸部小さな村にあるが、マリア信仰の聖地として古くから大勢の巡礼を集めてきた。このパルドン祭^{xix}はブルターニュでも最も大きな規模の一つで、泉信仰が強く残っている。教会の南門の入り口の外壁の上部に置かれた聖母子像は、人魚を踏みしだいている。女像の長い髪の間からは、短い2本の角が見え、指は4本で鋭い爪が生えている。右手にもつ丸いものは果実であろう。胸は少し膨らみ、腰に人魚特有のV字型の切れ込みがある。下半身は二股に分かれ、蛇の尾のように先が細くなり、一方は聖母の左足沿いに上に伸びている。入口の外壁には、悪魔を制圧する聖ミカエルの石像も配されている。悪を制圧する二つの聖像は、ル・フォルゴエットの辺りに、異教の自然信仰が深く根付いていたことを物語るものであろう。

- 禁断の果実

異類の女像は、水界との関わりを示す半身を持つだけでなく、多くの場合、手に赤や金色に彩色された果実を持っている。Brennilis (ブレニリス) 聖母教会の女像 (図3) は、きっと身を起こし、手に大きなりんごを持って前を見据えている。その下半身は緑のうろこに覆われて、髪は長く、頭に2本の赤くて短い角が生えている。St Hernin (サンテルナン) 教会の場合は構図に聖母アンナが加わる。そして、異類の女は聖母マリアとその母アンナの、両方から踏みしだかれている。そのためなのか、異類の女は赤いりんごを両方の手に一つずつ持っている (図4)。



図3. Brennilis (Finistère), 聖母教会、木製彩色、聖母子像の足元の異類の女



図4. St Hernin (Finistère), 聖母教会、木製彩色、聖アンナと聖母子像の足元の異類の女

異類の女が手に持つ果実は、りんごと解釈されている。りんごは、エデンの園の禁断の果実^{xxii}であり、ケルト信仰の楽園アバロンに実る、不死の果実でもある^{xxiii}。11世紀末のアイランドの伝承に、海へ出て行って二度と戻らなかった男の話があるが、男を他界に引き入れたのは美しい女が差し出した、「いくら食べても減らないりんご」であった^{xxiv}。

りんごが他界の食べ物と考えられていたのは、習俗の中にも見てとれる。フィニステール県の Plougastel (プルガステル) 半島では、万聖節の日^{xxv}に、「死者の木」と呼ばれるりんごを枝にさした木を作って辻に立て、死者に捧げるミサの献金を募る習慣があった^{xxvi}。死者の魂が斯界をさ迷よわず、速やかに他界へ転生することを願ったものであろう。

異類の魔性は、裸の上半身にも示されている。露わな胸と、肩を覆う長い髪。それは、増殖して止まない、女性の豊饒性そのものである。中世の神学者達は女性に精神性を認めず、その肉体を忌避して「腐りきった最悪の毒蛇」、「悪魔の門」などと弾劾し続けた^{xxvii}。それを受けて裸のイヴを淘汰する聖母子像も創られた。ブルターニュでは、Morbihan (モルビアン) 県の St Tugdual (サン=テュグデュアル) にある、聖グエン聖堂に見事な像がある (図5)。

「L'arbre de Jessé (ジェッセの木)」^{xxviii}と呼ばれる構図に組み込まれた裸の女の像で、横たわって夢を見る Jessé (ジェッセ) の足が、女の腹を押しやっている。女は蝙蝠のような耳を持ち、頭には2本の角が生えている。右手でりんごをかかげ、3本指の

左手は、起こした体を支えている。耳や角は女の異類性を強調しているが、膝を丸めた下半身は女の姿そのものである。丸い乳房はむき出しで、後から、手を加えられた様子はない。隣村の Ploërdut (プロエルデュット) にもジェッセの木に絡む異類の女の像があり (図6)、どちらも16世紀に村の工房で創られてものと推測されている



図5. St Tugdual (Morbihan)、Ste Guen 聖堂 木製、彩色、聖母子を中央に置き、その両側に王家の系図を示す木が枝を伸ばす。横になって眠るジェッセの足に、腹部を踏まれている裸女



図6. Ploërdut (Morbihan)、Notre-Dame de Crenenan 聖堂、木製、彩色、聖母子とそれを囲む王家の系図を示す枝。木は横たわるジェッセの胸から伸び、その反対側に上半身裸の異類の女が絡む。下半身は蛇

魔性を秘めた異類の女はブルターニュに多数現存しているが、裸の女像が、そのままの姿で残っている例はほとんどない。司祭が、凶像を人目に触れない場所に隠したり、胸を削り取らせるとか、全体を暗い色に塗らせるとかして、見せたくない部分に修正を加えさせているからである。フィニステール県の Plouider (プルイデール) の聖堂の聖母子像の足元の女像は、豊かな胸も体も全て黒く塗られ、赤く塗られた口と2本の長い角、そしてくねる蛇の尾が、女性性より魔性を前面に出している(図7)。



図7. Plouider (Finistère), St Fiacre 聖堂、木製、彩色、黒塗りの異類の女

- ダユ姫のイコノグラフィー^{xxx}

異類を制圧する聖母子像は、地元の職人の手になり、製作年度も作者名も記されていない。判っているのは、他に類を見ない異形の彫像が Basse-Bretagne (低ブルターニュ) と呼ばれる、半島の西半分にあたる地域で、16世紀から17世紀にかけて、多く製作されていることだけである。異類の凶像は、単独の像としても、広く点在している(図8)。その姿は、人魚であったり、下半身が蛇の場合もある。



図8. St-Urbain (Finistère), St-Urbain 聖堂の外壁上の人魚、下半身は魚の尾、左手で下腹部を抑え、後ろに伸ばした右手に鏡らしいものをもつ

異類の女像は、一体一体個性豊かで、独創的である。決して洗練されてはいないが、作者と作者が生きた時代の人々の思いが籠った凶像群で、口頭伝承に匹敵するインパクトを持っている。異類の女像は、時にダユと名指して呼ばれている。「あれはダユで、水界の母神に戻った姿だ」^{xxxi}とか、「墮落のダユでもあれば、アーサー王の妹の妖精モルガンヌでもあるし、中世の騎士物語に登場する湖の貴婦人ヴィヴィアンヌでもあるだろう」^{xxxii}などと、異類の像にダユの姿が重ねられている。ダユの像は、Menez Hom (メネゾム) 山から Yenn-Elez (イエネレス) の沼地へ向かう、アレ山地とその周辺の内陸部に多い。その訳は、「イスの町」の後日談がはっきり物語っている。異教の祭礼が取り行われ、土着信仰が根強く残っている場所だったからである。

イギリス海峡を渡ってブルターニュ半島に移り住んだブリトン人はキリスト教を信仰していたが、その信仰は、ケルトの母神信仰を色濃く残す異端の信仰であり、カトリックの教義とは大きくかけ離れていた。ケルト民族は泉の水にあらゆる霊能をみている。水は万病の薬で、泉の水を求めて巡礼行脚がなされていた。その水界を支配する

のは母神アンナで、生者と死者を守護して、両界の通路である沼地に棲むと信じられていた^{xxxiii}。この母神信仰を突き崩し、異教の儀礼を排除するために、伝道師たちは泉のそばに聖堂を建て、泉に聖母子像を置いて、カトリックの聖域に読み替えて行った。そのため、ブルターニュの聖堂には必ず泉がついている（図9）。



図9 . Plougastel-Daoulas (Finistère), Notre-Dame de la Fontaine-Blanche 聖堂の泉。

中に、石の聖母子像が納められている



図10 . イスの町の伝承の舞台となった、フィニステール県のドウアルヌネ湾からメネズム山、アレ山地一帯

異類を淘汰する聖母子像は、ブレニリスの教会にも見られる（図3）。ブレニリスの聖母は Breac-Ellis の聖母と呼ばれ、Yenn-Elez の沼から流れる Elez 川とその周りに広がる湿地を淘汰する意味が、その名

に込められていたものと思われる。沼は他界への通路であり、そこを支配するのはケルトの母神アンナであった。アンナがこの地で信仰を集めていたのは、青銅器時代からの豊饒神信仰が、その基底にあったからである。アレ山地の麓の湿地帯は、土壌が柔らかく、農耕に適していたため、古代からこの地に人々が移り住んでいた。インド・ヨーロッパ族の第1派の「逆さ釣鐘型土器人」は、母神信仰を持っていた^{xxxiv}が、それがケルトの母神アンナに取り込まれ、水界の豊饒神は沼地に生き続けて、キリスト教の侵入を阻んでいたのである。後日談が異教の火を見たメネズム山は3百メートルそこそこの低い山だが、ここから近年、ケルトの豊饒神 **Brigitte** (ブリジット) の頭部が発見されている。青銅のこの遺物は半島が古代ローマに支配されていた頃のものとして推測されている^{xxxv}。ブリジットの豊饒性は、水の豊饒神アンナに同化し、さらに、キリスト教の聖母アンナに取り込まれていった。Yenn-Elez の沼地を見据え、イスの町があったというドウアルヌネ湾を望むアレ山地の一体に、異類を淘汰する聖母子像を配し、聖母アンナに献じた教会を建立するのは、この地の異教を放逐するためであり、淘汰の証を残すためであった。沼の向こうにある、Braspars (ブラスパール) の聖ミカエル聖堂も、異教の地の淘汰を示す意図で建立されている。一つまた一つ、異教の地をキリスト教の聖域に転換して、その勝利の証の図像を置いていく。こうして、悪の排除を繰り返し示さなければならぬほど、異教は根強く残っていた。ランデヴェネックの僧院から布教に入った Judulus 司祭は、

異教を信奉する人々の報復にあつて、撤退せざるを得なかった程である^{xxxvi}。

聖者ゲノレの聖性を語る伝承にダユを登場させるのは、ダユを重ねて、原罪のイヴを、異教の母神アンナを、弾劾する宣教師たちの意図があつたからであろう。それが更に、図像化され、全ての悪を一身に負った異類の女は、海に沈んでいった。

—海へ還った妣

ダユ姫は、水に帰ってケルトの豊饒の女神に他ならない。異教の母神はキリスト教に淘汰され、父性原理の秩序社会に玉座を譲って舞台を降りて行く。けれど、姫神は永遠に消えてしまった訳ではない。海へ還って人魚に生れ変わり、蒼海を思いのままに生きているのだ。ブルターニュの民は、海を見る度に、沈んでしまったイスの町を懐かしみ、ダユ姫の歌声を探して耳を傾ける。

その海原の遥か彼方に、去ってしまった妣を懐かしんで、海を見つめる民がいる。その昔、豊饒の母はあらゆる生命に君臨する神であつた。その母神と決別し、自らの手で秩序社会を構築して行く日が来た時、島国の民は、母神を海へ還した。

去りゆく妣の後ろ姿は、切ないほど美しい。海に母を見、母に海を見る二つの文化の深層にあるのは、遠い昔、島国の民が海へ還してしまつた妣への、切ない郷愁なのかもしれない。

i (ブルターニュ地方の特殊性)

伝承の比較は、日本とフランスというより、日本とブルターニュ地方を対象とする。比較する海の姫神の伝承は、ブルターニュ独自のもので、フランスの他の地方には類例がない。その理由は、次に説明するブルターニュ文化の特殊性の故である。

- ブルターニュはフランスの西端にある海に囲まれた半島である。5世紀頃から、イギリス諸島にいたブリトン（ケルト民族の末裔）が渡ってきて、この半島に独立国を創った。そのため、フランスの他の地域とは民族も言語も異なっている。ブルターニュ公国は、16世紀末にはフランスに併合されるが、自治を守り続け、独自の文化を継承していく。しかし、18世紀末のフランス革命後、中央集権が強化され、言語はフランス語に統一され、学校でも、教会でも、ブルトン（ブルターニュの言語）は禁じられ、ブルターニュの文化は時代遅れの田舎者のレッテルを貼られて行く。ブルトンの継承は立ち切れとなり、今は、学校で学んで覚える言語となっている。

- ブルターニュは、麻の生産と海路貿易で中世に目覚ましく発展する。富は、村々の教会建築に注がれ、競い合つて高い塔のある教会が建てられた。ケルト民族は水の力を信じ、水界に母神を見ていた。それゆえ、ブルターニュの教会には必ず泉が付いている。内部には聖者の図像や彫刻が納められ、広場や辻には、カルベールと呼ばれる石のキリスト磔刑像が置かれている。その多くは船大工たちの手になるもので、15世紀から17世紀の栄華を今に伝える貴重な文化遺産をなしている。これらの彫像は、今もブルターニュの各地に点在する。ブルターニュはまた

フランス随一の酪農圏で、中世の面影を残す村々の間に牛が草を食む放牧場や、飼料作物を植えた畑が広がっている。

- ブルターニュは民話の宝庫としても知られる。19世紀末から20世紀の初めにかけて、ブルターニュは多くの民俗学者を輩出した。

Paul-Yves SEBILLOT、François-Marie LUZEL、Anatole LE BRAZ 等がそれで、ブルターニュの口頭伝承や習俗を聞き取り発表した。ブルターニュには、異教の要素が多く残されていて、人魚や妖精の登場する伝承、海にまつわる伝承などが伝えられている。また、海の色や空の色を気遣って暮らしていたのか、海の青さと草木の緑を、「glaz (あおい)」という一つの形容詞で表すのは、日本語と同様である。

ii 関敬吾『日本昔話大成』、角川書店、1978。

iii 「豊玉姫」説話の前にある、「失われた釣り針」の話。山幸が海神の宮殿へ行くのは、兄の海幸に借りた釣り針を失くし、それを見つけるためであった。海神は山幸に釣り針を見つけてやり、さらに二つの宝珠を与え、兄、海幸を懲らしめてその上に立つのを助けてやる。

iv P. MARTIN-CIVAT, *Le très simple secret de Mélusine*, Poitier, 1969.

v Y. BREKILLIEN, *Contes et légendes de pays breton*, Quimper, Nature et Bretagne, 1973.

vi P.-Y. SEBILLOT, « Notes sur la légende d'Is », in *Revue de Bretagne, de Vendée et d'Anjou*, tome XXII, Paris, 1899.

vii T. H. de LA VILLEMARQUE, *Le Barzaz Breiz*, Paris, Perrin, 1981.

viii 渡辺節子編『ロシア民衆の口承文芸3「伝説と世間話」上 - ロシア伝説集 - 』、ワークショッ

プ80、1981、p. 31所収「キテシ」 - 町は、皆さま方、トルコ娘から隠れたのだ。ここへ馬に乗ったトルコ娘がのりつけてきた。どこへ跳ねとぼうとも - 地下蔵のような穴ができる。聖なる町へ走りこんでくるとは、町は彼女の蹄のもとに崩れた。そしてその上がスヴェトロエ湖となったのだ。 -

ix C. LEVI-STRAUSS, *Mythologiques*, tome I, Paris, Plon, 1964.

x L. OGES, *La légende de la ville d'Is*, Quimper, Imp. Menez, 1946.

xi L. OGES, 前掲書。

xii P.-Y. SEBILLOT, (1899) 前掲書。

xiii T. H. de LA VILLEMARQUE, 前掲書、E. SOUVESTRE, *Le Foyer Breton*, Belgique, 1975.

xiv J. M. ABGRALL, *Notre-Dame de Rumengol*, Châteaulin, 1980.

xv A. LE BRAZ, *La légende de la mort chez les bretons armoricains I*, Marseille, Laffitte Reprints, 5^e éd., 1979, p.429-441.

xvi P.-Y. SEBILLOT, *Le Folklore de la Bretagne II*, Paris, Maisonneuve et Larose, 1968, P. 23-24.

xvii P.-Y. SEBILLOT, (1968) 前掲書。

xviii F.-M. LUZEL, *Contes populaires de Basse-Bretagne II*, Paris, Maisonneuve et Larose, 1967, p. 370-380.

xix P.-Y. SEBILLOT, (1968) 前掲書、P. 34-35.

xx L.-M. BODENES, *Plougastel-Daoulas, ses villages et ses traditions*, Brest, Ed. de la cité, 1978.

xxi パルドン祭は、守護聖人の加護を願って、聖

人の祭日に行われるブルターニュの伝統行事である。聖母信仰の強いブルターニュでは、8月15日のマリア被昇天の祝日の前後に行われることが多い。パルドン (pardon) は、フランス語の「ごめんなさい」にあたり、贖罪の宗教行事と説明されているが、もとは単に寄りあって楽しむ集まり (pardoun) だったと言われる。キリスト教の伝道士たちが、それを贖罪と祈願の一代宗教行事に仕立て上げ、パルドン祭として広まっていくのは17世紀の末あたりからであった。(参照、Ar Men, N60, 1994)

パルドン祭は、自然信仰の名残を色濃く残している。中でも泉信仰は強く、霊験あらたかな泉の水を求めて、遠方から人が集まってくる。信者達は、泉の水を体の具合の悪い部分につけたり、汲んで持ち帰ったり、あるいは願をかけて、泉の穴にコインを投げ入れていく。

ル・フォルゴエット聖母教会では、祭りの日が近づくと、教会の周りの藪は刈り取られ、野宿の場所や駐車場が畑の一角に設けられる。行事は2日前から始まって、夜になると、病人や老いた信者のために、秘跡が授けられる。陽が落ちて、蠟燭の明かりだけが灯る堂内の石の床に膝まずき、聖母に口づけをしては祈る黒衣の老婆たちを、この教会で見かけたのは、もう30年も前のことになる。

xxii 聖書には果実としか書かれていない。

xxiii G. LE SCOUËZEC et J.-R. MASSON, *Pierres sacrées de Bretagne*, Paris, Seuil, 1982.

xxiv G. DOTTIN, « La croyance à l'immortalité de l'âme chez les anciens irlandais », in *Annales du Musée Guimet*, Paris, 1886.

xxv 11月1日の万聖節は死者に祈りを捧げる祝

日で、日本の彼岸のように、人々は花を捧げに墓を訪れる。

xxvi L. M. BODENES, 前掲書。

xxvii J. DELUMEAU, *La peur en Occident*, Paris, Fayard, 1978.

xxviii 旧約聖書の中の「イザヤ書」の11章にヒントを得て創られた構図。ダビデ王の父 Jessé (ジェセ) がやがて生れる神の子の夢を見る。王家の家系はマリアを囲んで二手に分かれる枝の上に、人物像と共に描かれる。

xxix DRAC de Rennes, documents manuscrits classées dans le répertoire du canton de Guéméné-sur-Scorff.

xxx 拙著 H. AMEMIYA, *Vierge ou Démone*, Keltia Graphic, Spezet, 2005 参照。ブルターニュ地方のあらゆる型の異類の集大成。

xxxi O. EUDES, *Ys et les villes englouties*, Rennes, Ouest-France, 1979.

xxxii G. LE SCOUËZEC et J.-R. MASSON, 前掲書。

xxxiii L. M. BODENES, 前掲書。

xxxiv P. HONORE, *Histoire de la Bretagne et des pays celtiques I*, Rennes, Skol Vreiz, 1970.

xxxv R. SANQUER et D. LAURENT, « La déesse celtique du Ménez-Hom », in *Bulletin de la société Archéologique du Finistère*, XCVII, 1971, p. 85-108.

xxxvi G. LE SCOUËZEC, *Braspars, une paroisse des Monts d'Arée*, Paris, Seuil, 1979.